

「た」の特殊な用法について

紙 谷 栄 治

一

わたくしは前稿(紙谷1977, 1978)において、「書く」と「書いた」のような「た」の有無による対立(以下これを前稿のように、「く」と「くた」の形であらわす)が、テンスに関する意味とアスペクトに関する意味とをあらわすことについてみた。しかし「くた」の形には前稿でのべたテンスやアスペクトに関する意味では解釈できない特殊な用法とされるものがあることも、早くから指摘されているとおりである。たとえば金田一春彦氏1955は「「た」の特殊用法」として、

そうそう、きょうはぼくの誕生日だった。

の例文をあげられ、それについてつぎのようにのべられた。

これは、テンスを表わすものではない。と言って、アスペクトの一種でもない。テンスやアスペクトは、話し手にとって客観的な事柄を言い表わすのに対して、これは話し手にとっては主観的な事柄を表わすものである。これは小林英夫氏・三上章氏にならって、モードゥスと呼ぶべきものの一種だと考える。テンスやアスペクトは、それに対して、ディクトウムである。(32～33ページ)

「た」の特殊な用法について

また、三上章氏1955は「テンス」は「ムウド」から「分化」したものであり(165ページ)、

テンスがムウド出身であるという素性は容易に消えてしまうものではない。(225ページ)

とされたうえで、このような用法をテンスに属するものとされた。

さらに寺村秀夫氏1971はこれらの用法を詳細に検討されたうえで、「ムードのタ」として明確に位置づけられた。

本稿では、それらの諸説を参照しながら、これらの用法を整理し、前稿においてのべたテンス・アスペクトの体系にどのように位置づけられるかについてかんがえようとするものである。

具体的には、まずこのような用法についての従来の説をみることにし(第二章)、ついで、私見ではそれらの用法が前稿でのべたテンスとアスペクトの別にもとづいて大きく二分されることを示し(第三章)、さらにそれらに関連する意味についてのべる(第四章)ことにする。つづいて、三上氏が、「反省時」をあらわすとされた「のだ」の形(たとえば、「彼はそう思って書いたのだ」)について、テンス・アスペクトの観点からかんがえてみたいとおもう(第五章)。

二一

この章では、「た」の特殊な用法とされているものについて、三上氏1953・鈴木重幸氏1965がとかれるところをみることにする。

まず、三上氏は日本語のテンスは現在と過去の二時制であるとしたうえで、つぎのようにのべられた。

そしてテンスの対立は客観と主観との両方に沿ってあらわれる。ざっと次の五通りの対立として考えていこう。過去をさきにして過去形対現在形とする。

- 一、事実としての完了と未了
- 二、心理的な完了と未了
- 三、期待の有無
- 四、想起と主張
- 五、儀礼的な問いとたゞの問い

(220ページ)

このうちの一については、前稿でくりかえしのべたように、「過去」と「完了」とは互いに区別することができるとかんがえるので、ここでは除外する。そこで問題は二と五ということになるが、それらについて氏があげられた例文と、その説明のなかから最も重要とおもわれる部分をまず引用することにする。

二 主として未完成的な動詞にあらわれる。客観的事実としてはほとんど違わないか、或いは全く違わなくても、それを経験として報告する(間接的に)か、知覚として表出する(直接的に)か、

そういう主観的相違によってテンスを変える。

コノ椅子ハ先刻カラココニアツタ

コノ椅子ハ先刻カラココニアル

三 ア、ココ(自分の手のうち)ニアツタ、長イコト探シテキタな
いふガ

オヤ、ココニオレノ歌ヲホメタ批評ガアル、タツタ二三行ダガ
のような対立で、ナイフや批評のあり方自身には時間的差異はないのであるが、見つけ方に心理的相違がある。

四 或る命題の成立自身には過去とか現在とかの時間的区別はなくても、その命題の認識の時日の区別がテンスにあらわれるものである。性質上「デアル」で結ぶ名詞文に多い。

七分ノ一ハ循環小数ダネ?

七分ノ一ハ循環小数ダツタネ?

五 四と似た対立だが、それが儀礼的になったものを五とする。

油絵ヲオ描キニナリマシタネ?

油絵ヲオ描キニナリマスネ?

相手を既に知っているという気持を表すことが敬意になる。(222
→ 227ページ)

これらのばあいの「た」の形に微妙な心理的なニュアンスがあるのは、氏の指摘されるとおりだとおもう。それについての解釈については後にあらためて論じることとし、つぎに鈴木重幸氏1965についてみることにする。

氏は「過去形」のあらわす意味のうちで、「過去」をのぞいた「その

他の用法」にあたるものとして、主としてつぎの⑧⑨の二つをあげられた。

⑧ なお、過去形には、いくつか注意すべき用法がある。

視覚でみとめられる動作・作用が話し手の目の前でおこったばあい、話し手は、それを発見して伝えるわけである。だから、こうしたばあい、過去形の文には、話し手がそのできごとを発見したというニュアンスがつきまとう。

126 「いま、沼田先生の顔にはウソをついてる表情がハッキリと現われました……」(引用者注 以下、出典名は略す)

127 はじめにそれに気づいたのは新子だった。「来たわ、六助さん、さっきの人たちよ……」

これらは、話の瞬間以前に実現された動作・作用であるから、問題はない。次のようなばあい、存在そのものは、過去から未来にかけて変わっていないので、現在未来形を使ってもよいわけであるが、発見のばあいには、発見した時(過去)の状態として表わすことができるわけである。これは、「ある」「いる」など、存在を表わす動詞にみられる。

128 「あつた、あつた。なあんだ。こんなところにつっこんであつたんだ。」

129 「あつた、あつた……。井戸がありましたよ。」

130 「何だそこにいたの。いつ来たんです。」

資料にはなかったが、すでに予定されていた未来のことからに気づいたときにも過去形が使われることがある。このばあいは、未来

「た」の特殊な用法について

のことをいっているので、特殊な用法である。

注) たとえば、「あつ、しまった。あしたは約束があつた。」のように。これは「ある」に限られるようである。

この用法は、名詞述語文の「あしたはほくの誕生日だつた。」の用法に通じる。

⑨ 話し手は、過去のことからについて自分のふたしかな記憶をおもいおこして、それを相手にたしかめることがある。このばあい、過去形の文には、話し手のたしかめのニュアンスがつく。たとえば、「きみはたしか富士山にのぼつたね。」というように。これは過去のことからであるから、テンスとしては別にとりたてる必要はない。

ところが、次のようなばあい、過去の存在や習慣をおもいおこして、相手にたしかめている例であるが、その存在や習慣などは現在もつづいていることなのである。だから、現在形を使ってもよいのであるが、こうしたたしかめの文では、過去形も使われるので、注意しておこう。

131 「きみはたしかおっかさんがいたね。」

132 「また、外国語が出ましたな。ノウは英語にもありましたね。」

133 「きみは酒はだめだったが、たばこは吸つたね。」

相手に関することがらについてのたしかめのばあい、三上章氏は、 \langle 相手に既に知っているという気持を表わすことが敬意になる \rangle として、これを \langle 儀礼的な \rangle 過去と呼んでいる。(『現代語法

序説(旧版)』227ページ)(26~27ページ)

なお、そのほかにもいくつかをあげられているが、それらは当面の問題にとつてはそれほど重要でないとおもわれるので省略する。

ここで両氏の説をくらべてみると、三上氏の四・五と鈴木氏の⑧のよ
うにほぼ一致する点もあるが、そうでない点もみられる。それらについ
てひとつひとつ論ずることはここではひかえて、章を改めてまず私見を
のべ、そのうち両氏のとかれるところについて検討したいとおもう。

二

私は結果的には鈴木氏がこの種の用法を⑦と⑧とに大きく二分された
ことは、私見とは小異はあるが、重要だとおもう。そこでまず三上氏の
例文を少しかえたつぎのような例文から検討してみたいとおもう。

(1) 七分の一は循環小数だった？

この例文はつぎの二つの意味をあらわすようである。

(I) 過去における判断をおもいおこすのではなくて、実際に計算して
みた結果えられた判断についてたずねるばあい。

(II) 三上氏が「既に、教えたはずという心持の言方」と解釈されたよう
に、過去においてくださった七分の一が循環小数であるという判断を
おもいかえすばあい。

同様のことがつぎのばあいにもいえる。

(2) やはり彼はまだ東京にいた。

(3) そうだ、彼はまだ東京にいた。

はそれぞれつぎのような意味をあらわす。

(2) 実際に彼に出会ったことなどによって、彼がまだ東京にいること
を認識したばあい。

(3) 彼がまだ東京にいることを思い出したばあい。

わたくしは三上・鈴木両氏のあげられたすべての例文は基本的には右の
(I)(2)と(II)(3)の二種にわけられるとおもうのであるが、つぎにそれぞれの
位置づけについてかんがえてみたいとおもう。

(I) 鈴木氏が氏の⑦において「話し手がそのできごとを発見したとい
うニュアンスがつきまとう。」とされ、三上氏が三において「くた」の
形はすでに「期待」していたことをあらわすとされたものは、両氏の説
明によれば大きくちがうものようであるが、必ずしもそうではないよ
うにおもわれる。すなわち、三上氏の三の例文と鈴木氏の例文128,130をく
らべてみると、それぞれ期待のとおりであるばあいと期待に反するばあ
いとであって、「期待」と「発見」の名称にふさわしいようであるが、
わたくしはむしろ両者とも共通な意味をあらわすものとして説明できる
のではないかとおもう。その理由はつぎのとおりである。

わたくしは前稿において「くた」の形があらわすアスペクトに関する
意味として「既然」をあげた。これは動作・作用の実現に対してつけた
名称であって、いわゆる継続動詞・瞬間動詞をふくめた動作動詞は「く
た」の形をとつて動作・作用の実現をあらわすことができる。ところが
「いる」「ある」「だ」などは、「くた」の形をとらなくてもすでに存
在していることをあらわすのであって、それが「くた」の形をとつたば
あいには、動作動詞とはことなつて、「存在」が実現したことではなく

て、「存在」そのものはかわらずにただその「存在」を認識するにいたったことをあらわすのではないかとかんがえられる。たとえばつぎの二つの例文

(4) 辞書がこんなところにあつた。

(5) 辞書がこんなところから出てきた。

は同じできごとをさすとみることができ、(4)の「あつた」は存在の認識の成立として、(5)の「出てきた」は動作・作用の実現としてあらわしたものである。

このようにみると、この用法は存在の認識・判断の成立をあらわすものといつてよいようであるが、ここではこれを鈴木氏にしたがつて「発見」をあらわすものとする。ただしこのばあいの「発見」とは、「見出す」といふほどの意味であつて、「発明」に対する「発見」の意味ではない。

ところで、三上氏が三としてあげられた期待の有無についていえば、つぎの例文にもみられるように、やはり本質的なものではないようである。

(6) やはりこんなところにあつた。

(7) おや、こんな見なれないものがあつた。

そこで、これらのばあいについても「発見」をあらわすものとかんがえておく。

さらに、三上氏の二の「アツタ」の例文についても、おそらく過去において存在したのと同じのいすがやはり存在することを認めたことをあらわすのであろうから、この用法に入れてよいかとおもう。

「た」の特殊な用法について

ただし、鈴木氏が(7)にあげられた例文(12)の「現われました」、例文(13)の「来た(わ)」は、私見ではいずれも「既然」をあらわすということになる。例文(12)を例にとつていえば、

(8) あ、くる、くる。(こようとしているの意=将然)

(9) あ、くる、くる。(きつつあるの意=過程)

(10) あ、きた、きた。(「くる」という動作が実現したの意=既然)

(11) あ、きた、きた。(「くる」という動作の過程がおわつて、こちらについたの意=完了)

のようなアスペクトの体系のなかでとらえることができるものである。またこのばあいにも「発見」のニュアンスをみとめることができる。もうが、それは「既然」の意味に付随したものとかんがえることができるので、この用法からは除くことにする。

以上のように、この(1)の用法は、存在の認識・判断の成立をあらわすものであるが、この用法をもつのは、両氏によって指摘されているように、その性質上「存在動詞」や判断をあらわす語に限られるようである。それ以外の動詞の場合の「た」の形は動作・作用の実現そのものをあらわすので、このばあいのような意味はあらわせない。そこで、そのようなばあいには「くている」「くのだ」を介して「くっていた」「くのだつた」の形であらわすことになる。たとえばつぎのようなばあいである。

(12) やはり太郎は東京にいた。

(13) *やはり太郎は東京に住んだ。

(14) やはり太郎は東京に住んでいた。

(15) やはり太郎は東京に住んでいるのだった。

(Ⅲ) つぎに、前出の例文

(1) 七分の一は循環小数だった？

の(Ⅲ)の解釈、および

(3) そうだ、彼はまだ東京にいた。
のばあいにうつりたいとおもう。

この用法は、ことがら自体の時に反して「た」の形をもちいること
によって、過去における判断をおもいおこし、それにもとづいて発話時
におけることがらについて判断をくだすことをあらわすものということ
ができる。鈴木氏の(8)の例文がその代表的なものである。この用法は三
上氏(253)・金田一氏(253)によって「想起」とよばれており、本稿でもそ
れにしたがいたいとおもう。

ただ、この用法は、ことがら自体の時に反して「た」の形をとるこ
とに注目してたてたものであるから、過去のことがらに対してはあては
まらない。この点については、つぎのようにかんがえることができるか
とおもう。「過去」をあらわす「た」には、

(16) 若いころはよく働いた。

のように、過去のことがらを直接にあらわすばあいと、

(17) 今からおもえば、若いころはよく働いた。

のように、過去のことがらを回想してあらわすばあいがあって、後者
は「想起」につながっていくものとかんがえられるが、発話時点におけ
ることがらに対して判断をくだすものではない点がことなるのである。

また、この用法は疑問の形で用いられると、三上氏が五で指摘されて
いる婉曲で儀礼的な表現になる。後にのべる「仮定」の意味も、おそら
くはこの「想起」の用法が観念的な内容をあらわすところから生じたも
のであろう。

なお、鈴木氏は(8)において「たしかめのニュアンスがつく。」とされ
たが、それは氏の例文がすべて「ね」でおわっているところからきたも
のであって、本来のものではないようである。また鈴木氏が(8)の注であ
げられた二つの例文も、ふつうはむしろ(8)の「想起」の意味をあらわす
とみる方がよいのではないかとおもう。

また、三上氏が四としてあげられた例文についていえば、先にのべた
ように二通りに解することができるが、氏の解釈のばあいにはここに入
るのではないかとおもう。

なお、この用法は、過去における判断を想起し、それにもとづいて発
話時におけることがらに判断をくだすものであるから、(I)の「発見」の
ばあいのような動詞の種類による制約はないようである。たとえばつぎ
のような表現もできるようにおもわれる。

(18) 今晚の会は八時にはじまりました。

(19) あすはどちらへおでかけになりました？

本稿では以上のように(I)(Ⅲ)二つの用法をたてたのであるが、両者は(Ⅲ)
が過去の判断にもとづくものであるのに対し、(I)はそうではないという
点がことなっている。そして(I)はアスペクトに、(Ⅲ)はテンスにそれぞれ
由来するものとかんがえることができるかとおもう。この二種類の区別

は微妙ではあるが、やはりみとめることができるのではないかとおも
う。

なお、この種の用法を寺村氏「5」はムードのカテゴリーに属するもの
とされたが、本稿の段階ではそれについて検討できていないので保留し
たいとおもう。

四

本章では、前章にひきつづいて、「ゝた」の形の特殊な用法とされる
「仮定」「反実仮想」の意味をあらわす用法についてみることにする。

〔仮定〕

まず、つぎのような例文からみることにしたい。

㉔ 空港へは、高速道路を

とおる
とおった

ばあいでも、所要時間はあま

りかわりません。

この例文において「とおった」の形を用いると、「とおる」のばあいに
くらべて、仮定の表現であることが明確になる。また、「もし」「万
一」「かりに」「たとえ」などの仮定をあらわす語をともなうばあいに
は、もっぱら「とおった」が用いられることになる。そこで、このよう
なばあいにおける「ゝた」の形のあらわす意味を「仮定」と名づけるこ
とにする。

これに類する例としては、つぎのようなものをあげることができる。

㉕ この中には、Aコースをご希望だったかたが、あるいはいらっし
やるかもしれません。

「た」の特殊な用法について

㉔ それについて書いた本があつたばあいでも、あなたの役にたつと
はかぎりません。

㉕ ここにご出席のかたがたばごおすいになったばあいのこともか
んがえて、灰皿は準備してあります。

右の例文㉕は、現にAコースを希望する人がいるかもしれないばあ
いを、㉔はそのような本があるかもしれないばあいを、それぞれ仮定して
あらわしたものとみることができるといえる。

なお、例文㉕についていえば、つぎのような類似の例文をあげるこ
とができる。

㉔ (たずねてみて) Aコースをご希望だったかたには、便宜をはか
るようにします。

㉕ (さがしてみて) それについて書いた本があつたばあいにはお貸
しします。

しかし、このばあいの「ゝた」の形は、㉔は「希望であることが判明し
た」、㉕は「本が出現した」という意味をあらわすので、前章の(I)「発
見」にあたるものとみたい。

なお、例文㉕はたばごをすうことを仮定してあらわしたものであつ
て、動作の形態としての「既然」の意味をあらわすものではないよう
である。

つぎに、このような「仮定」の用法をどのように位置づけるかとい
うことであるが、以上の例文㉔㉕㉖についての解釈によっても、これら
のばあいの「ゝた」の形がアスペクトに関する意味をあらわすものとみ
ることには無理があるようである。むしろ、例文㉔㉕㉖については、

(26) 高速道路をお通りになりました？

(27) Aコースをご希望でした？

(28) それについて書いた本がありました？

(29) たばこをおすいになりました？

のような前章でのべた「想起」の意味をあらわす文を想定して、それが、(28)のばあいを例にとれば、

(30) 「それについて書いた本がありました？」「いいえ、私はしりませんが。」「そうですか。しかし、もしあったばあいでも、あなた
の役に立つとはかぎりませんよ。」

のように、「仮定」として用いられることになったとかがえてよいのではないかとおもう。「想起」の意味が、前章でみたように、「過去」の意味にもとづくものだとすると、結局この「仮定」の意味も「過去」の意味にもとづくものということになるわけである。

なお、つぎの例文のように、「した」の形が「既然」の意味をあらわして、あとの部分の条件になることはしばしばある。

(31) その方法が開発されたときには、製品の値段もさがらうでしょう。

この例文のばあい、既然にともなう条件をあらわすとみれば「した」の形自体が「仮定」の意味をあらわすとはいえないわけであるが、状況によつては「した」の形をとることによつて全くの仮定であることをあらわすこともあるわけである。

この「仮定」をあらわす用法は、終止用法として用いることはできないようであるが、つぎのように用いることができる。

(32) たとえたくさんの人が希望したとしても、それにこたえられるだ

けの条件がそろっているというわけではありません。

〔反実仮想〕

さきあげた例文(29)は、本が実際には存在しないばあいについてもつかうことができるが、そのばあいには「反実仮想」の意味をあらわすことができる。つぎの例文のばあいも同様である。

(33) 体さえ丈夫だったら、毎日がもっと幸福だった人もいます。

(34) あす出発する予定がもう一日おそかったら、参加できた人もいます。

(35) (手のあいている) あすだったらお会いした人にも(お会いせず
に)帰っていただいた。

(36) 知らさなかつたら、彼はあす何もしらないできたのに。

これらの例文では、事実に反する仮定がさきに示されており、傍線をつけたその仮定の帰結をあらわす部分においては現実の時にかかわらずに「した」の形を用いるという特徴がみられる。そこでそのようなばあいの「した」を「反実仮想」をあらわすものとしておく。

以上は連体用法のばあいであるが、さきの「仮定」のばあいとはちがつて、つぎのように終止用法としても用いられる。

(37) 体さえ丈夫だったら、これからの生活ももっと幸福だった。

(38) あす出発する予定がもう一日おそかったら、その人は参加できなかった。

(39) (手のあいている) あすきてくださったのなら、お会いしました。

(40) 知らさなかつたら、彼はあす何も知らないできたよ。

この「反実仮想」の意味を「仮定」の意味とくらべてみると、両者は

仮定の内容が現実に戻るか否かという点以外にはことなることがないようである。そこで、「反実仮想」の意味については、「仮定」のばあいと同様に、テンスに関する意味の延長上に位置するものとかんがえておくことにする。

最後に、以上のべてきたことにもとづいて、前章の「発見」「想起」および本章の「仮定」「反実仮想」のテンス・アスペクトの体系における位置を表にまとめるとつぎのようになる。

〈第 1 表〉

た	く		
仮定 (反実仮想)	過去	非過去	テンスに関する意味およびそれから派生した意味
想起 (婉曲)	発見	将来・過程	アスペクトに関する意味およびそれから派生した意味
		已然・完了	

わたくしはこのように以上にとりあげた意味をテンスおよびアスペクトに関する意味に還元してかんがえてみたのであるが、この表をひとまわずわたくしの現段階におけるテンスおよびアスペクトについての結論としておきたいとおもう。

五

この章では、「のだ(のである)」の形についてとりあげることにして、この「のだ」の形について、永野賢氏(1951)は、「のが」の形と

「た」の特殊な用法について

もに、

判断辞と結びついて、根拠のある説明、理由の提出、回想、二重判断、強調などの意を表わす。(172~173ページ)

とされた。また林大氏(1954)・山口佳也氏(1975)などによってもくわしく論じられている。しかし、本稿では「のだ」のあらわす意味そのものではなく、むしろ「のだ」の形がどのようにランスやアスペクトとかわるのかについてみたいとおもう。

そのような面から「のだ」「のである」についてかんがえられたのは三上章氏(1953)である。氏は「ノデアル」を「一種の組立時を作る準詞」(237ページ)とされたうえでつぎのようにのべられた。

「何々スル、シタ」の単純時に対し「何々スル、シタノデアル、アツタ」を反省時と呼んで対立させる。英文法で単純時と組立の完了時とが対立して、結局広義のテンスが二々が四つになっているようにである。「ノデアル」の機能はテンスばかりではなく、ムウ的なもの、アスペクト的なものにわたっているが、名称としては便宜上テンス扱いにし、各テンスの条下にいろいろな用法を説こうという計画である。

(何々スル+ノ) + デアル を
何々スル+ (ノ+ デアル) と

括り直す。この連体部分「何々スル」を既成命題とし、それに話手の主観的責任の準詞部分「ノデアル」を添えて提出するというのが反省時の根本的意味だろうと思う。アスペクトの問題で、ペアフェクティブの単調性に対しインペアフェクティブの粘着性ということが

<第 2 表>

(II)				(I)							
A の だ った B				A の だ B							
{ 将然 過程 }				{ 将然 過程 }							
非過去				非過去							
発見		反実 仮想		想起		過去		非過去			
A		B		A		B		A			
<p>65 64 63 62 61</p> <p>彼はさきほどから準備していた。彼はあす汽車にのっていくのだった。(予定の発見)</p> <p>おそくても確実につくために、彼は毎日汽車にのってかようのだった。(反復の発見)</p> <p>近くに学校がないために、ここからその学校へは汽車にのってかようのだった。(属性の発見)</p> <p>汽笛をならしたのは、汽車がちょうどいまトンネルにはいるのだった。(将然の発見)</p> <p>急におそくなったのは、汽車がちょうど長い坂をのぼるのだった。(過程の発見)</p>	<p>60 59 58 57 56</p> <p>おくれなければ、汽車はいまごろはトンネルにはいるのだった。(将然についての反実仮想)</p> <p>おくれなければ、汽車はいまごろはトンネルにはいるのだった。(過程についての反実仮想)</p> <p>近くにはいなければ、ここからその学校へはこれからは汽車にのってかようのだった。(属性についての反実仮想)</p> <p>鉄道が廃止されていなければ、これからは毎日汽車にのってかようのだった。(反復についての反実仮想)</p> <p>はじめの計画のとおりなら、あすは汽車にのっていくのだった。(予定についての反実仮想)</p>	<p>55 54 53 52 51</p> <p>汽車はちょうどいまごろゆっくりと長い坂をのぼるのだった。(過程の想起)</p> <p>汽車はちょうどいまごろゆっくりと長い坂をのぼるのだった。(将然の想起)</p> <p>ここからその学校へは汽車にのってかようのだった。(属性の想起)</p> <p>ここからその学校へは汽車にのってかようのだった。(反復の想起)</p> <p>あすは汽車にのっていくのだった。(予定の想起)</p>	<p>50 49 48 47 46</p> <p>汽車はちょうどそのときゆっくりと長い坂をのぼるのだった。(過去における過程)</p> <p>汽車はちょうどそのときゆっくりと長い坂をのぼるのだった。(過去における将然)</p> <p>かつてはここからその学校へは汽車にのってかようのだった。(過去における属性)</p> <p>かつてはここからその学校へは汽車にのってかようのだった。(過去における反復)</p> <p>そのころ彼は毎日学校へ汽車にのってかようのだった。(過去における予定)</p>	<p>45 44 43 42 41</p> <p>汽車はいまゆっくりと長い坂をのぼるのだった。(現在における過程)</p> <p>汽車はちょうどいまトンネルにはいるのだった。(現在における将然)</p> <p>ここからその学校へは汽車にのってかようのだった。(現在における属性)</p> <p>彼は毎日学校へ汽車にのってかようのだった。(現在における反復)</p> <p>彼はあす汽車にのっていくのだった。(現在における予定)</p>							

		A (Ⅳ)			A (Ⅲ)							
		B			B							
たのだった		反実仮想	想起	過去	発見	過去						
完了 既然		想起	想起	反実仮想	発見	想起						
発見		過去	想起	非過去	既完	既完						
反実仮想		想起	想起	非過去	既完	既完						
78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66
<p>78 鉄道が廃止されていなければ、これからも毎日汽車にのってかよったのだ。 (反実仮想についての想起)</p>	<p>77 ? 考えてみれば、その学校へはバスにのってもかよったのだ。</p>	<p>76 おそらくも確実につくために、彼は毎日学校へ汽車にのってかよったのだ。 (過去についての発見)</p>	<p>75 鉄道が廃止されていなければ、毎日学校へ汽車にのってかよったのだ。 (過去についての反実仮想)</p>	<p>74 今おもえば、彼は毎日学校へ汽車にのってかよったのだ。 (過去についての想起)</p>	<p>73 彼はいつも毎日学校へ汽車にのってかよっていたのだ。</p>	<p>72 彼はいつも毎日学校へ汽車にのってかよっていたのだ。</p>	<p>71 汽車はちょうどいまトンネルにはいったのだ。</p>	<p>70 近くに学校ができていなければ、ここからその学校へはこれからも汽車にのってかよったのだ。</p>	<p>69 鉄道が廃止されていなければ、これからも毎日汽車にのってかよったのだ。</p>	<p>68 はじめの計画のとおりなら、あすは汽車にのっていったのだ。</p>	<p>67 考えてみれば、その学校へはバスにのってもかよったのだ。</p>	<p>66 彼は毎日学校へ汽車にのってかよったのだ。</p>
<p>79 汽車はちょうどそのときトンネルにはいったのだ。 (過去における既然)</p> <p>80 汽車はちょうどそのときやっとな長い坂をのぼったのだ。 (過去における完了)</p> <p>81 汽車はちょうどいまごろまでにはトンネルにはいったのだ。 (既然についての想起)</p> <p>82 汽車はちょうどいまごろまでにはすっかり長い坂をのぼったのだ。 (完了についての想起)</p> <p>83 おくれているならば、汽車はいまごろまでにはトンネルにはいったのだ。 (既然についての反実仮想)</p> <p>84 おくれているならば、汽車はいまごろまでにはすっかり長い坂をのぼったのだ。 (完了についての反実仮想)</p> <p>85 汽笛をならしたのは、汽車がちょうどいまトンネルにはいったのだ。 (既然についての発見)</p> <p>86 急にはやくになったのは、汽車がちょうどいまやっとな長い坂をのぼったのだ。 (完了についての発見)</p>												

「た」の特殊な用法について

言われるが、我々の現代語では、この単調性と粘着性との対照が単純時と反省時との相違にもなっている。形式上

現在反省現在	何々スルノデアル
過去反省過去	何々スルノデアツタ
現在反省過去	何々シタノデアツタ
過去反省過去	何々シタノデアツタ

の四テンスになり、単純時二つとで計六テンスになる。(238~239ページ)

右の引用文中「ノデアル」の機能はテンスばかりではなく、ムウド的なもの、アスペクト的なものにわたっている」とされた部分については、氏はつぎのように説明されている。

提出された既成命題が、そうして提出されたということと理由や結論らしい役割をつとめて前後を結びつける、といった程度に因果関係をほのめかすものであり、一方提出によって命題の既成であることを併せ示している。半ば理由づけ(ムウド的)であり、半ば完了(テンス的)である。(242ページ)

氏が「反省時」についてのべられた要点は以上のようなものであるが、わたくしはむしろ氏が反省時をあらわすとされた「のだ」「のである」の形を

A	〔た〕の〔だ(である)〕
B	〔だ(である)〕の〔た(であった)〕

のように「の」の上の部分(A)と下の部分(B)とにわけ、それぞれ

が「た」「のだ」の形をとることができるものとかがえ、A・Bそれぞれを、本稿までにテンス・アスペクトについてのべたところ(結論は前章の第一表)にしたがって解釈してみたいとおもうのである。このことは、また第一表にあげたような意味をたてるのが妥当であるかどうかをためすことにもなるかとおもわれるのである。

そこでまずA・Bがそれぞれ「た」「のだ」の形をとったばあいにはあらわすことができる意味の可能なくみあわせを(I)~(IV)にわけて表にまとめてみることにする。(26~27ページの第2表)

つぎにこの第2表についての説明をまとめておくことにする。

(i) 三上氏は「のだ」の形について「反省時」をたてられた。「のだ」の形が「反省」の意味をあらわすことはたしかであるが、第2表にみられるように、「の」を介したA・Bの部分はすべて第1表にあげた意味によって解釈できるようである。そこで本稿では特に「反省時」をたてるとはせずに、これまでにのべたテンスおよびアスペクトに関する意味に還元してかんがえることにする。

(ii) AとBとはテンス・アスペクトに関してそれぞれ独自の意味をあらわすが、それぞれの意味のあらわれかたをつぎの三通りにわけてかんがえることにする。

〔Bが非過去をあらわすばあい〕

このばあいのBは、現在(発話時)における判断であることをあらわすものであって、Aには非過去・過去、将然・過程・既然・完了および想起・反実仮想・発見のように、第1表にあげたもののうち仮定をのぞいたあらゆる意味がくることができる。

「Bが過去をあらわすばあい」

(II)において、Aが非過去、Bが過去をあらわすくみあわせが可能であるのは、連体用法における非過去は、前稿でのべたように、現実の時とは関係なく用いられて、予定(予測)・反復(習慣)・属性(当然)などの意味をあらわすものであって、過去という現実の時をあらわす「た」の形とは矛盾しないためであるとかんがえられる。

また(II)(IV)において、Aが将来・過程・既然・完了、Bが過去をあらわすくみあわせが可能であるのは、前稿でのべたように、テンスに関する意味とアスペクトに関する意味とは互いに区別されるものであることを示している。

「Bが非過去・過去以外をあらわすばあい」

このようなばあいは(II)(IV)にみられるが、そのうちの大部分はAにはテンスに関する意味の非過去・過去、アスペクトに関する意味の将来・過程・既然・完了が、Bには想起・反実仮想・発見の意味がきている。このようにみると、想起・反実仮想・発見とその他の意味との間にはやはり性質の相違がみとめられるようである。本稿ではこれらの意味をテンス・アスペクトに還元してかんがえたが、やはりこの点についての問題は今後にもこのるわけである。

(iii) また、このようにBの部分に想起・反実仮想・発見の意味がくるときは解釈が微妙である。そこで、そのばあいの問題をまとめてあげることにする。

① (IV)の例文(78)については、それぞれA・Bとも想起、Aは反実仮想・Bは想起をあらわすものと解した。それぞれの例文を(iii)の(69)とく

「た」の特殊な用法について

らべてそのようにかんがえたのである。同様の関係はつぎの例文についてもみることができよう。

(67) 申しこみはここでもうけつけて

くれたのだ。
くれたのだ。

(Bは非過去)

(Bは想起)

(Aはともに想起)

(68) きのうまでに出荷していたら、あすには市場に

ついたので。

(Bは非過去)

ついたので。

(Bは想起)

(Aはともに反実仮想)

② (II)における例文(69)と(70)とは、同じ意味をあらわすとみることができよう。これらのばあいには両方のあらわしかたができるようである。

(iv) 本稿の第1表であげた意味のうち、「仮定」の意味については、その用例を見出すことができなかつたのでこの表にはあげなかつた。「仮定」の意味は連体用法においてあらわされるものであるが、「のだ」は連体用法といっても文に相当するものをうけるためかとおもわれる。

(v) 例文(73)にかぎってAの部分に「ていた」の形をもちいた。これは、すでにのべたように、いわゆる動作動詞はふつう、「てた」の形をとっても、「発見」の意味をあらわすことはできないとかんがえたためである。

六

以上でいわゆる「た」の形の特殊な用法についての検討をおえるこ

とにしたい。本稿ではそれらの用法についてテンス・アスペクトとの関連という点から一つの解釈を示したわけであるが、それらの用法の検討は逆に前稿でのべたテンス・アスペクトについての考え方を検討することにもなるようにおもわれる。それだけにこの用法の解釈は重要であるが、問題が微妙であるために異なった解釈ができる余地も多いわけである。またこれらの意味とムードとの関係などの問題についても、今後の課題としたいとおもう。

〔引用文献〕

- 金田一春彦1955「日本語のテンスとアスペクト」(『名古屋大学文学部研究論集X』同氏編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房所収)
- 鈴木重幸1965「現代日本語の動詞のテンス——言いぎりの述語に使われたばあし——」(『ことばの研究』第2集 秀英出版)
- 寺村秀夫1971「「タ」の意味と機能——アスペクト・テンス・ムードの構文的位置づけ——」(『言語学と日本語問題』くろしお出版)
- 永野賢1961『現代語の助詞・助動詞——用法と実例——』国立国語研究所
- 林大1964「タとナノダ」(『講座現代語6』明治書院)
- 三上章1953『現代語法序説』刀江書院
- 山口佳也1975「「のた」の文について」(『国文学研究』(早稲田大学) 56号)
- 紙谷栄治1977「助動詞「た」の一解釈——形式名詞「とき」につづく場合を中心——」(『京都府立大学学術報告人文』第29号)
- 1978「連体用法におけるテンスに関する意味について」(同第30号)
- (昭54・7・30)

本稿は一九七九年国語学会春季大会において、「現代日本語におけるテンスとアスペクトについて」という題で研究発表した内容の一部である。そのテーマに関する一連の論文については「国語学」118集をご参照いただければ幸である。

なお、発表の際には諸氏から、また鈴木重幸・高橋太郎・土屋信一先生からは私信で、宮地裕・木下正俊・村木新次郎先生からは直接に、それぞれいろいろと貴重なお教えをいただいた。ここに心からお礼を申しあげる次第である。